担当者コラム

ここでちょっと振り返り

第4回までを振り返り、担当者として特に印象に残った言葉と、その受け止めをまとめてみました。

一つ目は、藤先生が発言した「プロジェクトの趣旨が『新しい価値』の発見にあるとすれば、価値は『創造』するものではなく『模索』していくものではないか？　だとすると『実験的』な取り組みであるべきで、経験を重ねていくことが大事」です。

確かにそうですよね。人口減少や少子高齢化が進む社会の中で、これまでの価値観にとらわれずに地域活性化に取り組むとすれば、「成長」というプラスだけではなく、何かを引き去る（または何かに特化する）ような「マイナス」することで新しい価値を生み出すこともあります。藤先生は別の機会に、「地域豊醸化」ということも言われていましたが、新しい価値や豊かさなどは、経験を重ね、失敗も糧にしないと見えてこないのかもしれません。

次に石倉先生の「人類学ではHuman BeingからHuman Becomingということが言われている。『人間はこうである』という定義から『人間は変わっていくもの』であるというもの」という発言。

これは深いですよね。そして、「アーツ秋田構想」実現のためのプロジェクトの性質を言い表しているのではと感じました。私たちは暮らしているまち・秋田市を知っているか？　まちの歴史や文化、そして活動や人を本当に知っているのか？　知ったつもりになっているけれど、知らないことの方が多いということを認識して、まさに秋田で学び、秋田で創ることで違う秋田を描いていくということなのではないかと思いました。

第4回からメンバーとして参加いただいた安藤伸一さん（秋田魁新報記者）も、このHuman Becomingという言葉を聞いてすぐに、「人形道祖神のイベント（小松クラフトスペースで開催）には、若い人が多く参加しており、民間伝承や民間信仰などを知ることで自分の生活を変容させ、生活をポジティブに変えていこうとする空気を感じた」と反応されていました。

あえて厳しい表現をしますが、「秋田には何もない」「秋田は何をやってもだめだ」と大人が口にしてしまうと、その背中を見ている若者は秋田に対して肯定的になれません。逆に、こうして秋田を知ること、しかも上の世代にとって当たり前であっても、若い世代にうまく伝わっていない歴史や文化を若い世代が新鮮に受け止め解釈することで、逆に私たち大人が学ぶこと、気付かされることも多いのではないでしょうか。

そして、服部先生が発言した「トップダウンのまちづくり、まちおこしではなく、ボトムアップで若い人が動くフレームをつくるといいのではないか」です。

行政という仕事の関係上、「まちづくり」や「まちおこし」という言葉を多く使いますが、未来のまちの姿は、このまちに暮らす人たち、関わる人たち、さらには訪れる人たちの思いから描かれていくものであって、そこからふつふつと湧き出てくるさまざまな動きが未来のまちを形づくっていくものだと思います。

このために行政はどんなことができるのか、服部先生が言うフレームをどうつくるのかということなんだと思います。同じような発言は藤先生や石倉先生からもあり、つながりのあるキーワードとして「新しい生き方を肯定する」、「挑戦する姿が見える」なども未来のまちのスタンスを考える基本的な考えを示しているように思います。

こうして考えていくと、「アーツ秋田構想」は、なぜ「アート」なのか、「芸術・文化」なのか？という問いにも答えられるような取り組みのスタンスをまとめることができてきたのではないでしょうか？

ロードマップと具体のコンテンツを実現するには、まだまだハードルはありますが、「アーツ秋田構想」は、秋田市の芸術文化によるまちづくり、そして「文化的・創造的な都市」を目指す考え方（方向性）として形になりつつあると感じました。

こんな状況を経て、第5回ディレクション会議は、「アーツ秋田」の方向性を「言葉化」することにこだわってみました。藤先生から「言葉をつくること」を提言され、私たちも「一言でアーツ秋田の方向性や姿勢を表せる言葉が必要」と思っていたこともあり、これまで同席をお願いしてきたライターの方々に、ブレインストーミング的に言葉（コンセプト）の洗い出しをお願いしたのでした。

さて、第5回の意見交換は少し気楽に、そして改めて考えながら振り返ってみましょう。

全体像をどのように整理するか…ビジョンをつくる

秋田公立美術大学でも、（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）でも似たようなことをやろうとしている。一つにまとめた方がいいのではないか。根本にあるのは、全体像をどのように整理するかということで、その中で役割分担をしていった方がいい。――**服部**

赤れんが郷土館や民俗芸能伝承館、千秋美術館など、縦割りになっている文化施設に対して全体の仕組みをどのように入れていくか。施設はあるものの、しっかりとしたキュレーション[*17]ができているところがない。アウトリーチ[*18]もいまいちである。どういう人たちに対して、どういうものが提供できるのか、そういうビジョンをつくっていくことが必要。――**藤**

＊17 **キュレーション**
美術館や博物館、図書館などにおいて収集された展示物や情報等を、専門家の独自の価値判断で整理すること。

＊18 **アウトリーチ**
美術館学芸員などが、学校や集会所などのさまざまな場所に出向いて、アートに接する機会を提供する活動。出前授業やワークショップの開催など。

アーツ秋田の拠点＝（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）では？

アーツ秋田と（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）は、一緒に考えた方がよい。――**服部**

（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）は、アーツ秋田の拠点という認識。これまでディレクション会議で話し合ってきたことは、秋田市の芸術文化施策の方向性を示す構想であって、それを踏まえて、（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）では、施設の運営だけではなく、他の文化施設や公共施設、民間などとつながりながら、施設の外で未来に向けた動き、プロジェクトを進めていくということ。――**藤**

”言葉”

ディレクション会議の議論を踏まえ、言葉化チームが「アーツ秋田」、「文化的・創造的な都市」の概念を表す言葉を提示しました。

”言葉”

第5回ディレクション会議
2018.7.31 秋田公立美術大学にて

「言葉化チーム」より提案された数々の言葉を前に、さまざまな意見が飛び出してきた

A.nd プロジェクト

あ、んだ。の
ひらめきから、
みんなで楽しむ
プロジェクト。

犬だけじゃない、
#AKITA

街中年中、
創造夢中

このまちは、
ぼくらの
ラボラトリー

「秋田である」ではなく
「秋田になる」という「姿勢」を表すには
とても良いですよね。英語の文法からす
るとBecoming Akitaになるのかな?
コンセプトとしても悪くない。

ここで
生まれた人も、
そうでない人も。

Akita Becoming

見慣れた景色、
見慣れた人。
だけどドキドキ。

北緯 39 度の
文化決戦。

見慣れない景色、
見慣れない人。
だけどワクワク。

小さなaは一人一人の
市民(リトルa)。そして大きなAは秋田市。
aの積み重ねとつながりがAを形作って
いく。市民プロジェクトがベースである
というコンセプトを視覚的にも表せるし、
イラストにもしやすいですね。

Amusing Akita

んでね

A.muse Akita

a/A

A.muse Park

TODO Creative

A Museum
Market

A Museum Marche

A.Museum
プロジェクト

A.Museum

コミッティブ
サミット
プロジェクト

コミッティブ
クリエイティブ

こみっと。
がりっと。

コミッティブ
サミット

まちづくりを
遊ぼう。

これは秋田弁であり、
かつコミットメントもかけてるよね。
秋田弁の「こみっと」は、ひっそり、静かに、
みたいな意味で、「こっそり」活動しているうちに、
その継続とつながりが「ごっそり」まちを変える
と面白いね。英語のコミットメント
にもつながるし。

こみっと。

まちは創造の
パレットだ

こみっとA、
秋田を
おもしろがる。

こみっと。
ばやっと。

こみっとサミット

あした、
あさって、
見漁って。

まちじゅう
クリエイティブ!

まちじゅう
クリエイティ部。

クリエイティブ
仕様都市 A
(クリエイティブ
しよう! 都市)

あきた
よりみチル。

あした、
あさって、
し漁って。

街にアートの
風が吹く。
人が振り向く
場所になる。

おばあちゃんの味、
それだって立派な
作品になります。

思いを声に。
好きをカタチに。

70 代と 20 代。
今日から
アーとも。

70 代と 20 代。
今日から
アートつながり。

これは、わかりやすい。
コンセプトというよりは、その下の
サブタイトルとか、パンフレットに使う
フレーズに良いかも。

人とまちに
アートの栄養を。

ひとりひとりが、
アーティストに
なれるまち。

まちは、みんなの
アートラボ。

まちラボラトリー

カンバスは街。
市民みんなが
アーティスト。

これもコンセプトにはなりうる。
姿勢ではないけど、まちの許容力、
懐の深さを表せる気がする。実験的なことが
許されるまち=ラボラトリー、化学変化が起きやす
いまちという意味になるし、「まちぜんたい」
の言葉が、公共空間を開いていく、
トライできるイメージも表せる。

それは、
街を育てるアート
プロジェクト。

いつもの街を、
いつも以上の街に。

まちを
美術館にする。

まちぜんたいが、
アートラボ。

まちは、
みんなの実験室。

五感で感じる、
まちづくり。

まちは、
美術館になる。

毎日が、芸術祭。

街を耕す、
アートを植える。

(仮称)芸術祭から脱却しつつ
あるのに、破れかぶれで「芸術祭」(笑)。
この姿勢が挑戦的で面白いかも。
まちの創造力が高まった将来、自然発生的に
その力を見せるデモンストレーションが
出てきて、それを、「祭」と呼ぶなら
理想だよね。

まちは、
博物館になる。

スクラップしない
ビルド。

365日、
芸術祭。

試験館

まちは、
実験室になる。

いつでもどこでも、
芸術祭。

年中、
発芽しちゃって
いいんです。

市民一人一人が生活
している姿と、日常での気づきが
イメージしやすいですね。
これもコンセプトというよりは
フレーズかな?

後出し
ジャンケンが、
一番強い。
遅ればせながら、
芸術祭やります

降りて歩きたく
なる街には、
アートの風が
吹いていました。

まちに、
クリエイティブ
タネをまこう。

クリエイティブの
タネをまこう。

クリエイティブの
芽を育てよう。

春夏秋冬、
芽吹いてる。

「おもしろい」を
つみあげるまち

まちぜんたいが、
おもしろラボ。

まちぜんたいを
おもしろラボに。

年中、発芽。

まちに、
ひらめきの
タネをまく。

まちぜんたいが、
おもしろ畑。

言葉化チーム(22ページ参照)が提案した「アーツ秋田」「文化的・創造的な都市」の概念を示す“言葉”と担当の受け止め

アーツ秋田 構想

新県立美術館のカフェ「光風」から見た旧県立美術館

ディレクション会議メンバー

服部 浩之
（インディペンデント・キュレーター）

1978年愛知県生まれ。早稲田大学大学院修了（建築学）。2009年-2016年青森公立大学国際芸術センター青森［ACAC］学芸員。アジア圏を中心に展覧会やプロジェクト、リサーチ活動を展開する。藤井光をディレクターに迎えAHA！［Achives for Human Activities!/人類の営みのためのアーカイブ］とも協働した「歴史の構築は無名のものたちの記憶に捧げられる」（2015年）など滞在制作を軸としたアーティストとのプロジェクトを実践。「十和田奥入瀬芸術祭—SURVIVE：この惑星の、時間旅行へ」「アッセンブリッジ・ナゴヤ」など。2019年に開催されるヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館キュレーターに選出された。秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科、美術学部アーツ&ルーツ専攻准教授。

石倉 敏明
（人類学者／神話学者）

1972年東京都生まれ。多摩美術大学芸術人類学研究所助手を経て、2011年より明治大学野生の科学研究所研究員。1997年よりダージリン、シッキム、カトマンドゥ、日本各地で「山の神」神話調査をおこなう。環太平洋の比較神話学や芸術人類学の研究に基づき、神話集、論考等を発表。共著・編著に『Lexicon現代人類学』『野生めぐり 列島神話の源流をめぐる12の旅』『人と動物の人類学』『道具の足跡』。高木正勝によるCD作品とのコラボレーションに『タイ・レイ・タイ・リオ紬記』（神話集）など。2019年ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表作家。秋田公立美術大学大学院複合芸術科、美術学部アーツ&ルーツ専攻准教授。

藤 浩志
（美術家）

1960年鹿児島県生まれ。奄美大島出身の両親の影響で大島紬周辺に遊ぶ。京都市立芸術大学在学中、京都情報社を設立。同大学院修了後、青年海外協力隊としてパプアニューギニア国立芸術学校に勤務し、原初的表現と文化人類学に出会う。帰国後、都市計画事務所勤務を経て、藤浩志企画制作室を設立。地域資源・適正技術・協力関係を活かした美術表現を志向し、全国各地でプロジェクトやデモンストレーション型の美術表現により「対話と地域実験」を実践。「ヤセ犬の散歩」「お米のカエル物語」「Kaekko」「Polyplanet Company」「藤島八十郎をつくる」など。十和田市現代美術館館長を経て、秋田公立美術大学副学長。

渡邉 靖
（秋田商工会議所経営支援部まちづくり推進課）

2002年秋田商工会議所に入所。2014年から経営支援部まちづくり推進課勤務。秋田市中心市街地活性化協議会、秋田市商店街連盟など、商業まちづくりに関わる業務を担う。また、東北六魂祭2015秋田、これが秋田だ！食と芸能大祭典などの観光振興・交流人口の拡大に取り組む。

齋藤 一洋
（秋田市企画財政部企画調整課）

1988年秋田市役所に入所。2009年から企画財政部企画調整課勤務。県・市連携文化施設整備や旧県立美術館を再生する（仮称）秋田市文化創造交流館整備、文化創造プロジェクトなど、芸術文化によるまちおこしの推進を担う。

安藤 伸一
（秋田魁新報社）

1996年秋田魁新報社に入社。文化部、社会部、政治経済部などを経て2010、11年に秋田市政担当記者としてまちづくりを取材。現在はデジタル部長として秋田魁新報電子版（ウェブサイト）の編集に当たる。
※第４回から参加

■言葉化チーム

ライターである髙橋ともみさん、藤島美香子さん、万屋隆さんが“言葉化チーム”を結成し、アーツ秋田や「文化的・創造的な都市」の概念を表す“言葉”づくりに取り組みました。

■記録チーム

会議におけるメンバーの言葉 …… 将来のまちづくりに向けた方向性を示すキーワードの数々を記録するのが、NPO法人あきた地域資源ネットワークを中心とした記録チーム。秋田公立美術大学の３人の教員の発言を中心に繰り出されるキーワードに、平元美沙緒さんのグラフィックレコーディングが伴奏するかたちでディレクション会議は進行しました。

「文化創造のまち」へ

【アーツ秋田構想】

■未来に生き残るために【背景・経緯】

人口減少や少子高齢化の進行、それに伴う地域社会の変化や経済、財政への影響など、**私たちを取り巻く環境が大きく変わりつつある現在、これまでの暮らし方や働き方、考え方や取り組みなどを、こうした変化に対応したものにしていくことが**求められています。

そのためには、私たちが過去を学び、ありのままの今を見つめ直し、未来に向けた挑戦や失敗などの経験を重ねながら〝創造力を高め、発揮し、新たな価値を生み出していく〟ことが必要です。

生み出された多種多様な価値とそれを受け入れる寛容性が、私たちが住むまちを元気にし、未来の文化を創っていくものと考えます。

芸術文化は、人々の生活の中で精神的な支えとなり、まちに魅力を創りだし、生産や流通、観光など、産業や経済においても様々な影響を与えてきました。

秋田市では、第13次秋田市総合計画「新・県都『あきた』成長プラン」において、「ともにつくり　ともに生きる　人・まち・くらし」を基本理念に掲げ、この理念のもと「芸術文化・スポーツ・観光による都市の魅力向上」を成長戦略に位置付け、その重点プログラムの一つとして「芸術・文化によるまちおこし」を進めています。

アーツ秋田構想は、これまでの取り組みを土台としつつ、市民が様々な分野の専門家・研究者とともに学び、**未来に向けて新しい文化（価値）を生み出していくための創造的な取り組みを進めるという、今後の〝芸術文化によるまちづくり〟の方針**を示すものです。

■「文化創造のまち」の実現【目的】

市民や民間、行政が広く連携し、学生や市民団体、ＮＰＯ、教育機関、さらには医療機関や福祉施設など、**このまちに関わる者がまちづくりの当事者となり、様々な課題に向き合い、柔軟な発想（創造力）をもって多彩なプロジェクトを展開し、まちの未来を創っていく**ことを目指します。

■未来の文化（価値）を創るための仕組みづくり【方針】

市民が、未来の文化（価値）を創り、楽しむ活動を展開できるよう、次の3つを柱とした仕組みづくりを進めます。

①市民と専門家・研究者の協働

まちに関わり、まちを楽しむ活動の創出や連鎖を図るなど、まちづくりの基盤である市民と、日常に新たな価値を見いだし、又は新たな価値へと生まれ変わらせる力を育むなど、創造力を高める専門家・研究者との協働

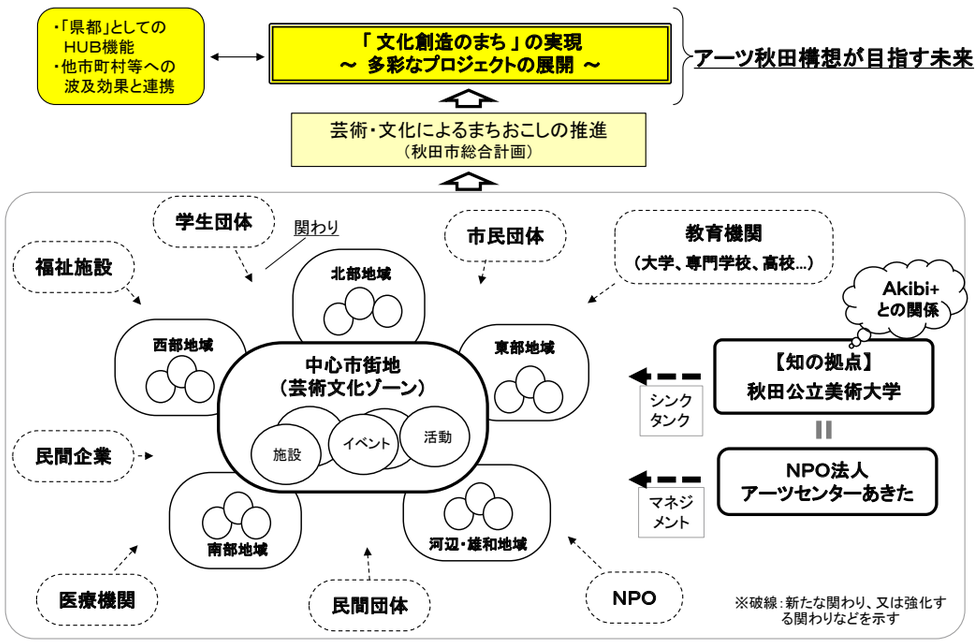
②実験的取り組みの展開

市民が社会課題に対して創造的な活動で向き合う取り組みにデザインや編集の思考を取り入れる、未来に向けた暮らし方や働き方、まちづくりなどの提案と実験的取り組みの展開

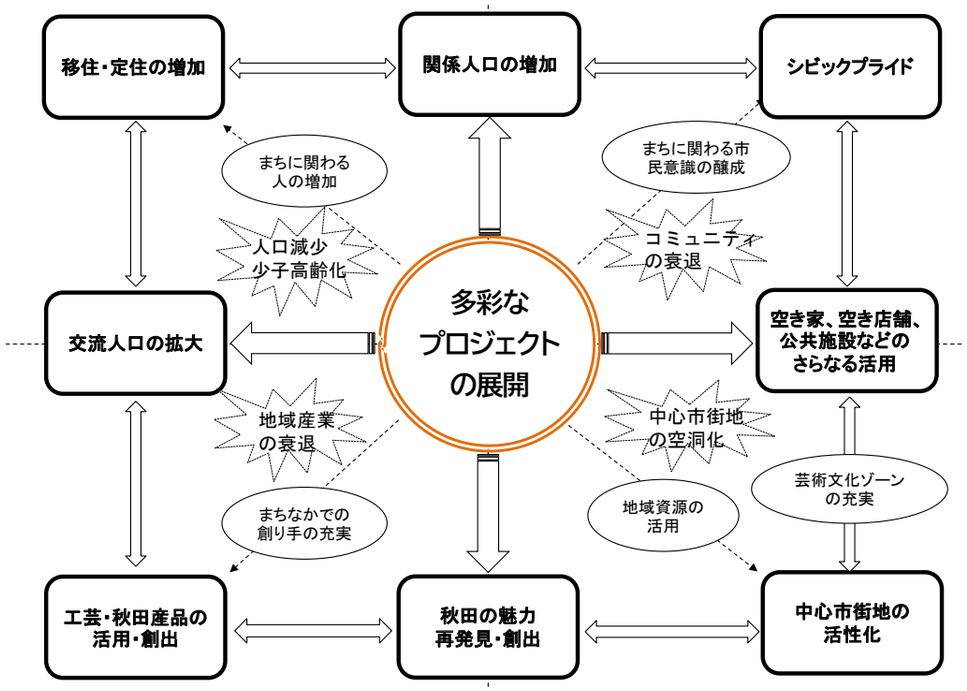
③多様な空間と時間の創出

未来に向けた活動を創ると同時に、その活動が蓄積し、互いに結びつくことなどにより、新たな文化（価値）が生み出されていく多様な空間と時間の創出

アーツ秋田構想



未来に向けた多彩なプロジェクトの展開イメージ



■取り組みが必要な部分

秋田市では、中心市街地を芸術文化ゾーンとして充実すべく、県・市連携文化施設の整備や旧秋田県立美術館の活用などに取り組んでいます。他地域においては、新屋ガラス工房や土崎みなと歴史伝承館等を拠点に、地域資源を生かした住民主体のまちづくりを進めています。

また、民間の動きとして、秋田市中心市街地活性化協議会が芸術文化ゾーン活用研究会を立ち上げ、行政や文化施設、民間事業者などの連携を図りながら、トライアル事業や情報発信を行っているほか、河辺・雄和地域では、河辺雄和商工会が中心となって「芸術の里かわべゆうわ」としてアーティストの誘致やアートの里づくりが進められています。

そして、秋田市には「まちづくりに貢献し、地域社会とともに歩む大学」を基本理念の一つに掲げる秋田公立美術大学や同大学が設立したNPO法人アーツセンターあきたがあり、芸術文化によるまちづくりを進める上での大きな強みとなっています。

こうしたこれまでの取り組みについて、中心市街地を例に、「主な活動①」と「文化施設（場所）②」の現状を、次の2つの軸においてみます。

・「市民 ～ 専門家・研究者」をつなぐ担い手（広さ・深さ）の軸

・「過去の文化（価値）を継承する活動 ～ 未来の文化（価値）を創る活動」をつなぐ活動の軸

「未来の文化（価値）を創る活動」を展開していくことが必要と分かります。

■文化創造プロジェクト【具体の取り組み】

芸術文化ゾーン（中心市街地）を重点エリアとしつつ、市域全体に広がるよう市民や民間、行政が広く連携し、市外や県外、国外を含めた多くの人やまちとつながりを持ちながら、**未来の文化（価値）を創っていくための取り組みを（仮称）秋田市文化創造交流館（旧秋田県立美術館）を拠点に進めます。**

■芸術祭から文化創造プロジェクトへ

秋田市では、学識経験者や各地の芸術祭で総合ディレクターなどを務めた専門家、アーティスト、市民との意見交換をしながら、秋田市における芸術祭の開催について、方向性やあり方の検討を進めてきました。

全国各地で開催されている芸術祭は、地域に多くのアーティストを招き、作品展示を主な内容としたものとなっていますが、その開催には多くの費用と労力（アーティストや運営スタッフ等）などが必要であり、加えて、アート（アーティスト）とまちづくりの関係性といった課題もあります。

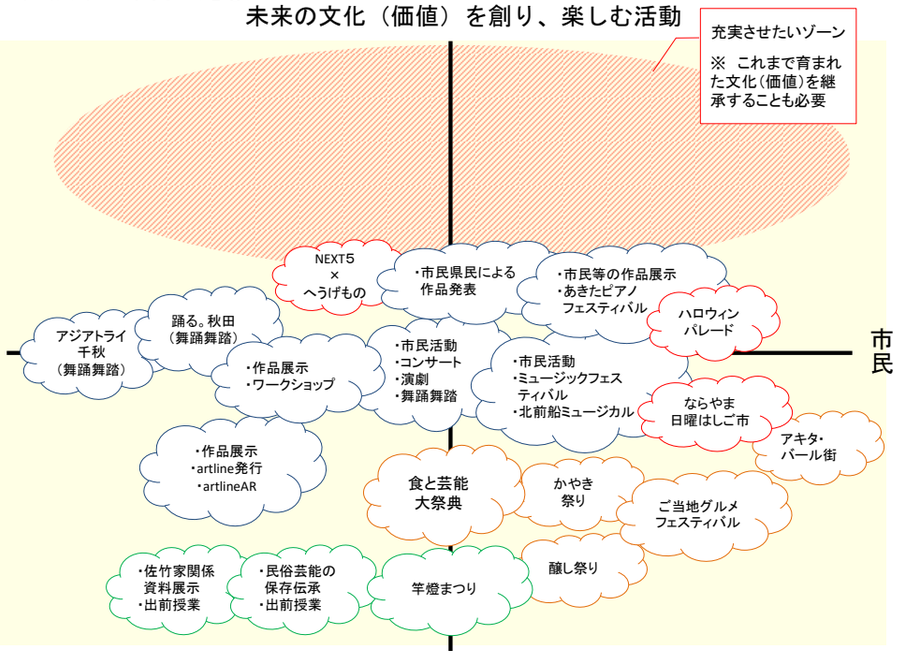
このため、芸術祭を開催してきた自治体等の中には、交流人口の拡大や集客を主な目的とした芸術祭から、関係人口の拡大や人やまちの創造力を高めることなどを目的としたアートプロジェクトにシフトする動きが出始めています。

専門家等からの意見や他都市における芸術祭、さらには芸術祭の次の動きを考える議論などを踏まえ、秋田市における芸術祭は、「人やまちの創造力が高まり、未来に向けた多彩なプロジェクトが展開されてきた際に、未来の文化（価値）を創り、楽しむ活動が可視化されていくこと」であるべきと考えました。

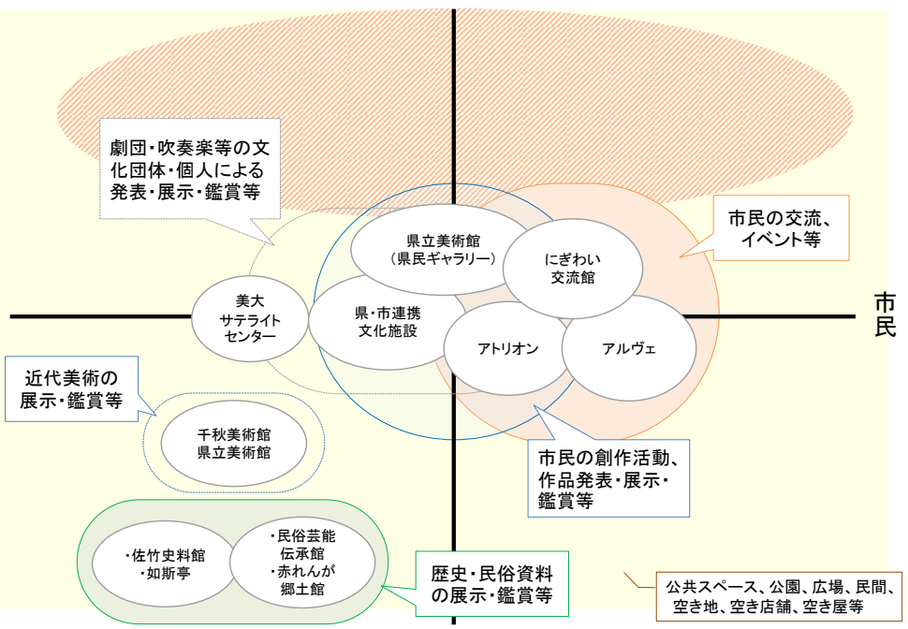
また、この検討の中で、秋田市では、これまでの取組を土台としつつ、未来に向けて新しい価値を生み出していくための創造的な取組を進めるという方向性を見出し、これを今後の芸術文化によるまちづくりの方針「アーツ秋田構想」として掲げることとしました。

従って、秋田市では、芸術祭の開催を目指すのではなく、アーツ秋田構想に基づき、市民協働によるまちづくりが日常的に行われる〝文化創造のまちの実現〟を目指した継続的な「文化創造プロジェクト」に取り組むこととします。

【主な活動（中心市街地）】①



【主な場所（中心市街地）】②



まちなかがっこう

「まちの部活」のサイクリング部が巡った新屋のまち。
写真の建物は参画屋

担当者コラム

アーツ秋田構想

20年ちょっと前、私が学生だった頃、秋田駅前には、駐輪スペースではないところ、ちょっとした隙間にも若者たちの自転車が所狭しと置かれ、みんなで本屋やゲーセンに行ったり、イトーヨーカドーの地下で昼飯を食べたりしていました。

今振り返ってみると、何となくまちなかに若者や子ども達がいて、活気があったように思います。それが今日、若者や子ども達の姿が減り、まちのにぎわいが徐々に失われてきていると感じます。国全体で人口減少や少子高齢化が進行していく中で、これまでの制度、行政のあり方はもちろんですが、市民一人ひとりの考え方、価値観、ライフスタイル、ワークスタイルでは、社会の大きなうねりがもたらす課題に対応できず、まちが衰退してきているのではないでしょうか？

そんな時代だからこそ、今を形づくってきた〝人やまちの記憶・歴史〟や〝ありのままの現在〟を見つめ直すことは大切で、これからの生き方を考えるために学ぶことは不可欠なものとなっています。ただ、それをそのまま受け継いでいくだけでは、極端な話しですが、人やまちの進化が〝今〟で止まり、大きなうねりに飲み込まれ、消費されるだけの存在になってしまいます。

〝今〟を形づくるものを見つめ直し、掘り下げ、〝今〟に疑問を感じ、抗う。それを活動や態度に表し、多くの人やまちと共有し、ともに未来に向けて進化を続け、消費されるだけの存在から脱却しなければならないと思っています。そのためには、互いの違いや、挑戦すること、失敗することを認め合う、そういう寛容さを私たち一人ひとりだけでなく、まちそのものが持つ必要があります。

アーツ秋田構想は、そうした未来に向けて変化していくための仕組みづくりをするもので、その具体的なプロジェクトが今まさに始まろうとしています。ただ、何ごとも〝やるからには楽しむ！〟で、未来を創ることを意識する、関わることを楽しむ、そのための妄想をしながら、未来に向けてみんなで歩みを進めたいと思っています。一緒に〝私たちの未来を創って〟みませんか？

秋田市では、〝芸術・文化によるまちおこし〟を掲げていますが、これは、過去につくられた〝芸術文化を生かす〟だけではなく、人やまちが〝未来に向けて自ら底力を蓄え、養い、未来に生き残る〟ための取り組みです。その意識や行動が文化そのものであり、その積み重ねが未来の文化となっていくものと考えています。

『踊る。秋田2017』野外公演 県内ストリートダンスの競演／出演者：秋田大学医学部ダンスサークル Dooties（写真提供『踊る。秋田』）